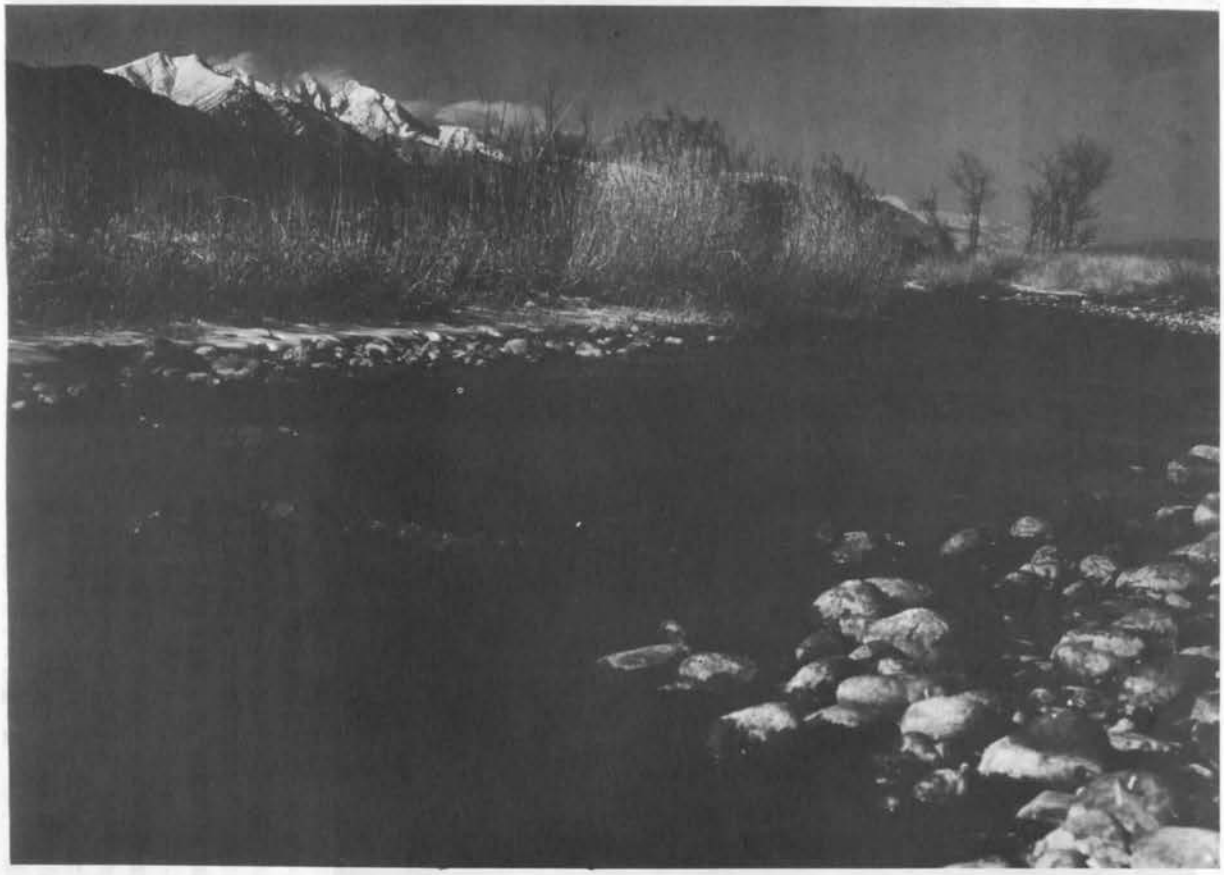
山と博物館

第24巻　第3号　1979年3月25日　大町山岳博物館



早　春　　撮影　古幡和敬

青木湖東側の花々のこと

青木湖周辺の美しさといえば水の清さ、冷たさ、そして静かさなど誰にでも知られておりますが、案外誰にも知られず東山に咲く四季折々の花のあることをお知らせしてみたいと思います。

春の雪解けを待ちこがれ残雪のちらほら見える小川の岸に咲き出す「猩々袴」松本の縄手から北海道の「雪割草」といわれ買って大切に冬越しをして咲かせたらこの花だったというエピソードのある花です。又杉小立の中にひっそりと咲く「一人しずか」「かたくりの花」「春りんどう」又大きな葉の上にぽっかりと気高いうす紫の花を咲かせる「しらね葵」、「ばいけい草」。等々高山植物を含め本当に文字通りのお花畑です。

初夏の声を聞けばかん林の中では「どうだんつつじ」「れんげつつじ」「いわやまつつじ」「うらじろどうだん」等々つつじの種類が一面に咲き、せせらぎの音そのもののようなかのこ草がそのあでやかな姿を水鏡にうつせば負けじと木立の中に「岩鏡」が咲き出し谷一つへだてた草原の中には「鈴蘭」のかわいい群がそこはかとない香りをただよわせています。

木立の中に「ささゆり」が咲き匂い、又「やぶかんぞ」の咲くのもこの頃でしょうか。夏も盛りとなれば「日光きすげ」、「山ゆり」「やなぎらん」「女郎花」「おとこへし」等数えれば限りがありません。少し足をのばして「おわた沢」というところのたんぼのあぜには「あずま菊」の原種といいましょうか、野生といいますか群生して咲いています。この頃も知人と話し合ったのですが、この「女郎花」がだん〳〵姿を見せなくなってしまいました。秋の「松虫草」「我毛紅」「りんどう」「ほたる袋」等々数えればいとまがありませんが、こんな美しい花々が折々に眺められる場所はあの白馬三山の眺めと共に捨てがたいものがあります。この花々の生命が開発の爪にたたれないことをひたすら祈りつつペンをおきます。

（山博協議会委員　加藏絹子）

焼岳の噴煙

三井嘉雄

焼岳が大爆発して梓川を堰止め大正池をつくったのは、大正四年六月六日のことである。

この爆発を目撃したのが前田次市という猟師で、上高地の清水屋にいたところ、「その朝七時半ごろ、ドーンという大音響とともに焼岳が噴火、ぐらぐらと前後三回にわたる上下動の地震が起こった。ものすごい黒煙が天に昇ってその中に赤い火花がちらちらした。黒煙はもくもくとひろがって中天をおおうと、あたりは夜のように暗くなり、夕立ちのように音をたてて灰が降りはじめた」。（『上高地の大将』）という。そして、白骨温泉に逃げこんだときには、全身傷だらけであった。

松本測候所の記録には、このときの噴火を次のように記している。

「七時三十五分爆発。この爆発の三十分ほど前からひんぱんに地震が起った。ことに七時三十三分の地震は強く、上高地、白骨では強く家屋を振動した。

この噴火のため、焼岳の東側の下堀・中堀両沢の中間台地（海抜一九〇〇m）からほぼ西に向う長さ約一kmの大亀裂を生じ、その端はほとんど山頂東側壁に達していた。この大亀裂の深さは約二十mもあり、ところによってはその幅が百二十mにもおよんでいた。爆風のため、根抜きにされた樹木もありまた、泥流を生じて梓川に入り、水面上に約五mの突堤を築いて一時流水を堰き止め、忽ち決壊して洪水となり下流沿岸に氾濫した」。

湖水ができたことを聞いた湖沼学者田中阿歌麿が上高地に着いたときには、すでに大正池の名があったという。爆発の翌日、ここに調査に来た松本測候所の松本秀雄が命名したともいわれるし、それは松本営林署員が名付けたともいわれる。一説によれば、はじめ梓湖と仮称していたのを、大正と改元されたのを記念して大正池になったともいう。

しかし、実際は大爆発前日の五日の小噴火で梓川は一時堰止められ、この大噴火で周囲二里の湖水が生じたのであった。

六日の爆発は、山麓まで臭気をとどけたし降灰によって桑の葉がつめなくなって蚕に大損害を出したし、爆発音によって鶏は卵を生まなくなってしまい、里でも無関心ではいられなかった。

この年の七月中旬に焼岳に登頂した穂刈三寿雄によると、「私たちはその道から中堀沢の新噴火口へ登ると、中腹から上は噴火当時の降雨により溶けた灰の為に熊笹などの青きものはすっかりおおわれて灰一色になり、（中略）新噴火口は中堀沢を登りつめた焼岳の八合目の辺にあり、今は青々と水を湛えて静まりかえっているが、この時には直径数間もある火口一杯から白煙を噴き上げ、その鳴動は立っている足に伝わって来て物凄く、捲き上げる煙が風にのって」（『槍ケ岳と共に四十年』）登山者を驚かせたということだ。

それと同じ頃、焼岳の頂上に来た板倉勝宣も、「噴火口に着くと臭い煙が襲ってくる。足下は底知れぬ穴となる。左右はぐっと高い岩でいま立っている所は鞍部の中央である。黄色の煙が濛々とわいて左の岩を越えて風になびく。我らは右の岩にとよじた。穴がやや中まで見える。」（『雪と岩の日記』）と証言する。さらにその案内人が、ここにはでかい木があったんだが、という。高山なので、ここに大木が育ったということは、かなり長い間、焼岳に大爆発がなかったということになる。

焼　岳　　撮影　東京都小泉成子

また、大阪朝日新聞の七月十三日付には火山学の大森房吉について、「大森博士の一行が島々の宿を立って、徳本峠に爆発後の焼岳探険に上ったという八日の朝、記者も同じ島々の宿を立って一足違いに徳本峠へ出た。博士の一行は柳沢松本測候所長、大久保同所技師等を始め、各村長警察官小学校帝大生など二十七、八人、神高地（上高地とも書く＝原注）の温泉場に滞在して十日から恁々と連日研究に移る予定だそうだ。記者は徳本峠では、焼岳見て来ましたという、フランスという横浜の英国人一行にも逢った」。と伝えている。おまけに記者が松本に着いたときには、焼岳上りの乗合いが出るとの呼びこみも目撃している。今日と違って、火山の爆発は登山禁止につながるどころか、見物登山の誘発していたのだった。

慶応大学山岳部は七月下旬、二班にわたって焼岳登山をし、第二隊の班長は槙有恒だったし、同じ頃、京都一中山岳会が十五人、八月上旬には東京高等師範付属中学の山岳会一行三十二人が焼岳に登った。おまけに、朝日新聞後援、大阪市教育会主催の日本アルプス踏破団が合計六十人の団体で焼岳に登頂している。もっとも、この踏破団は、別に白馬岳に登る団体も募集したから、偶然、時期が重なったのかも知れないし、ほかの学生たちも例年踏襲の焼岳登山であった。

焼岳の爆発は、天正十三年（一五八五）の噴火で飛騨の中尾部落三百戸を埋めつくしたと伝えられるし、安政五年（一八五八）大地震を起こしたといわれる。

そして、長い間沈黙していたのだが、明治二十二年十二月になって鳴動がはじまり、二

十五年頃からその数が多くなっていった。爆発が起こったのは明治四十年十二月のことで高山に一センチの灰を降らせたのだった。

明治三十九年八月に蒲田から中尾峠を越えた林並木は、焼岳噴火の前兆を感じていた一人であった。

「数十歩にしてその頂に至る、見渡せば絶頂より少しく東に下りたる数箇所の岩隙より、盛に白色の硫気を噴出し、濛々として立昇る有様、雲の如く砲烟の如く、（中略）その噴出の勢立山地獄谷のそれの如く猛烈ならず、何等の爆音なく、悪臭の甚だしきなく」（『笠ケ岳焼岳穂高岳紀行』）。

焼　岳

ところが、中尾峠でゴザを敷いて休んでいると、「忽ち我腰部に当りて焼くが如き痛あり、驚きて立ち上りてご蓙の下に手を入るれば熱きこと甚しく」、焼岳の温度が年々上昇していることを知る。上高地温泉に来てそのことを話すと、皆が近々噴火があるのではないかというのだった。

河野齢蔵も三十八年に、「焼岳の北面と硫黄岳の南面とは無数の噴気孔ありて常に濛々白煙を噴出して壮観を極む」と記している。このときは河野は、南安曇郡梓組合の教師を大勢引卒しての焼岳登山であった。

焼岳の噴火の記録は続く。明治四十一年に三回、四十二年には十回、四十三年三回、四十四年は十一回、四十五年に十二回。

焼岳噴火を心配した日本山岳会は、明治四十一年八月に状況を調べるため会員七人が焼岳に登り、頂上に登山記念の標柱を建ててきた。その二日後には、南安曇記者倶楽部の主催した焼岳探検隊の一行四十数人が登っている。一行は白骨温泉から出発して、細池あたりから尾根を直登した。このルートは、のちに道が開かれた一時期があるが、この時はかなりヤブをこいで登ったのであろう。

噴火の規模については、明治四十二年に山頂に来た保科五無斉の記述に詳しい。

「頂上附近に於ては、直径一尺五寸位の富士岩塊を抛げ出し置き候得共、頂上より半里程なる蒲田峠の頂上附近に於ては、直径三寸位のものが大関に御座候。更に半里許り下りたる麓の辺にては、直径三分位のものにて、上高地温泉にては、直径一分位なるは、其最大なる物に御座候。」（『五無斉保科百助全集』）。

保科によれば、その頃さかんに噴煙を上げていた浅間山に比べれば、焼岳は小屁をたれた程度だということである。しかし、その後四十四年の爆発のときには火柱が見えたし、その翌年二月には、東京や千葉にまで灰を降らせたのだった。

さて、明治四十年に焼岳がはじめて噴火したときには、その報道は新聞によって焼岳とするもの、硫黄岳と記したものなど山名がまちまちであった。その後も、新聞によって両方の名が出てきて混乱し、おまけに浅間山の噴火も加わって、おりから新聞は爆発の記事でにぎわった。

一つの山を信州側では焼岳と呼び、飛騨側では硫黄岳といっていたためで、これは近代測量によるいくつかの地図にも別々の山として採用されていた。このことは、江戸時代でも同じだったようで、信州側の出版である『信府統記』や、飛騨側の『斐太後風土記』でも、やはり別々の山として扱われているのであった。しかし、中には同山異名を承知していたものもあり、天保六年の『信濃国大絵図』では、焼岳の名の隣りに、「此焼岳飛騨国ニテハ硫黄岳ト唱フ」と注釈を入れている。

ただ、厳密にいうと焼岳と硫黄岳は実は別の山なのである。硫黄岳というのは中尾峠にある小隆起のことで、旧中尾峠はその南側を、新中尾峠はその北側を通っている。河野齢蔵は、「硫黄岳は少しく低くして其（焼岳の）北に連り中間に飛騨に通ずべき峠あり、」（『硫黄岳の噴気孔』）と述べていて、これが正しい。これを区別していたのは、信州側だけである。

たび重なる焼岳の爆発によって、山をはさんだ両側の地域の人びとの呼び方の相違に気づき、それを報じる新聞も次第に焼岳の名に統一されていった。そして、明治末までには焼岳として山名が定着したのだった。

大正八年十一月一日の焼岳の噴火を伝える東京朝日新聞は、「上高地にては遠雷の如き音響を聞き、松本よりは二日常より太き噴煙を望み得たり、同地一帯は雪降り積り、其中に黒煙濛々と立ち、頗る奇観壮観なり。」と述べている。

（登山史研究）

山の甲虫 (2)

―シデムシ類の分布を追って―

輿水太仲

次に、山のシデムシは、どのように発生を繰り返しているかをみると、表4のような状態がみられる。ここにあげたのは数種についてであるが、全体的にみて、各種が一斉に発生していないことがわかる。

また年間を通じて、一回発生するものと、二期にわたって発生しているものがあることがわかる。無論この表の様に線の切れたとたんに発生が止まり、切れている間は絶対に発生が停止するわけではないが、最も多く発生する時期があるわけである。このことは、食性を共にする者同志の生活には、極めて重要なことであるように考える。つまりどの種についても、他の種との発生ピーク時が重ならないことは、食生活の安全を確保できるからである。

またみかたによって、発生期が二回あることは、その種が年間二回の発生をする。つまり二化性であろうことも考えられるが、これについては、各種の条件飼育による生活史の調査をしなければわからないことで、ここで判断をくだすわけにはいかない。

次にこれらの発生ピークがどの辺でおこなわれているかを考察すると、表5のようになる。

表中、クロシデムシのようなものは、ある時期一定のところに発生すると、その年は再び別なところでは発生をみることなく、次のホソヒラタシデムシのように、線が二本重なって上下にあるものについては、場所をちがえて二回発生する場所があることである。このように二回発生するものを、その発生期に合わせてみると、下位の線の区間の発生時期と、上位の線の発生期間とは、上位の線の方がある時期おくれていることから、これらのシデムシは、山すその方でくらすものは、適期になると活動をはじめるが、高所のものは不活動でいる。やがて高所のものが適期を迎え活動する頃には低所（下位の線の区間）のものはその一生を終えると言うことが、あたかも表の中では、二ケ所の発生区間を持つ様に表われるのではないかと考えられる。

何れにしても、高度に対し順応性の広範な種は、この様に発生か所を、時をちがえて繰り返し、下の方から上の方に、こき上げる様に発生地を移動しながら、結果的にその山での全体数を増す。つまりは優位な位置を占めるのではないかとうかがうことができる。

〈このほかの昆虫〉

山でのシデムシの生活、活動の概略は、以上の様であるが、トラップの中にはこれ以外に、センチコガネやオンタケクロナガオサムシや、ヒメマイマイカブリのような甲虫もたくさん入る。そこで、これらの甲虫のうち、オンタケクロナガオサムシについてふれてみると、最初この虫の発見地は、木曽御岳山であり、北アルプスでも発見され、高山にすむ…云々と多くの著書に記されている。而し浅間でも、立科でも、ごくありふれた虫が如くに、而も一〇〇〇m内外のところで平気にみられる。長野県は全体が高所にあるから、他と比べると高所かも知れないが、一〇〇〇m帯は、当県とすれば、高山とは云えない。そんないわば平地に普通状態でみられる虫であるから、今後の記事には修正することが必要のように考える。

〈まとめとして〉

長らく調査を休んでいたが、再び佐久地方の山で、シデムシ類の調査をはじめ、いつ果てるともなく続けてみようと考えているが、いくつかの新知見を得ることが出来た。

ここに記したことごとは、非常に端折ったことでのみあるが、要は、山の昆虫の生活様式の巧妙さを記したかったのである。

生物―昆虫―は山野に只わけもなく生活していないと言うことが、シデムシの数の上からも多少なりわかるだろうことを願って書いてみた。

（佐久市立中込小学校・教諭）

表4　シデムシ類の発生期間

種名＼発生期間	7月	8月	9月	10月
ホソヒラタシデムシ	―			
ビロウドヒラタシデムシ		―		
ツノダロモンシデムシ		―	―	―
ヨツボシモンシデムシ	―		―	
マエモンシデムシ	―		―	―
ヒロオビモンシデムシ		―		―

表5　シデムシ類の発生場所の移動

博物館だより

帯刀千仁（なおわき）さん逝去

親切な動物飼育係のおじさんとして、市民はじめ、小中学生、登山者、観光客らから親しまれていた帯刀千仁さん（55）が、三月七日に亡くなり、帯刀さんを知る人から惜しまれています。

帯刀さん

昭和四十三年四月から当博物館で飼育されているカモシカやタヌキ、イヌワシ、キツネニホンザルなどの飼育係として十年余にわたり世話をしていました。

ライチョウ寄付金

五〇〇〇円　東京都練馬区南大泉五四〇　藤田いさを

山と博物館第24巻第3号
一九七九年三月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市表町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）